

平成 28 年度

地球環境「自然学」講座

第 3 回

テーマ

アユの復活を願い 川漁師に生きる

講師

高知県友釣り連盟 顧問
「仁淀川リバーキーパー」代表世話人

松浦 秀俊 先生

平成 28 年 5 月 14 日(土)

NPO法人・シニア自然大学校

講師プロフィール
松浦 秀俊 （まつうら ひでとし）

1956 年高知県生まれ。「高知県友釣連盟」顧問、「仁淀川の緑と清流を再生する会」顧問、「仁淀川リバーキーパー」代表世話人、「物部川 21 世紀の森と水の会」、「鏡川流域ネットワーク」等河川環境保全に関わる NPO に参画し、釣り人や漁業者、流域住民と一緒に、河川環境の再生やアユ資源の復活、子供たちの川遊び復権を目指して、様々な活動に取り組む。



小学校の低学年を高知県西部の佐川町を流れる仁淀川支流春日川で、高学年を旧中村市の四万十川や支流の後川のほとりで過ごし、川遊びや釣りの楽しさを知る。中学・高校では、主に高知市内の鏡川や仁淀川でアユ、アマゴ釣りに明け暮れ、趣味が高じて大学も水産学科に進むも、勉強には熱が入らず、もっぱら釣り竿片手に全国の川を釣り歩く。

大学卒業後は、アユ釣りをするために地元に帰り、水産技術職員として高知県に入庁して、内水面漁業センター、水産試験場、漁業指導所、漁業管理課等に勤務し、この 3 月に定年退職する。

30 年余り前から高知県東部の物部川ほとり香美市土佐山田町に住居を構え、4 月からは妻の扶養家族となり、現在川漁師見習い中。

著書「川に親しむ」（岩波ジュニア新書）、「土佐のアユ」「土佐の川」（ともに共著、高知県内水面漁連発行）、「アユの科学と釣りー美しい川とアユを願って」（分担執筆、(株)学報社）他釣り雑誌等に雑文掲載

子どもたちと川あそびのいま・むかし

子どもたちの歓声と水しぶき…川はいつもそこにある

かつて、

童謡に謡われているような、

「童つ子がどじょういりやふなつこ」を

驚かせていた小川は、

日本中にあった。

水ぬるむ季節となれば、

子供たちにとって格好の遊び場になる。

毎日のように遊んでいた川。

むかし、川には

「川の子供文化」が

あったのかもしれない。

TEXT BY HIDEOSHI MATSUKURA
PHOTOGRAPHS BY KAZUO MATSUKURA

子供も川の生物のひとつと化していた

今から40年近く前、まだ小学校に入ったばかりの私は、学校が終わると友達といっしょに、毎日のように家のすぐ裏を流れる春日川へフナやハエをすくいに通っていた。春日川は高知県の中西部を流れる仁淀川にそそぎ込む、川幅も10畳前後の、当時の日本のどこにでもあるありふれた小川だった。そして、当

松浦秀俊

まつうら・ひでとし ●1956年高知県安芸市生まれ。高知県海洋漁政課勤務。幼い頃から川遊びを楽しみ、大学は水産生物学を専攻。81年より高知県庁に勤務。現在も川通いを欠かさない。著書に『川に親しむ』『土佐のアユ』『土佐の川』（共著、高知県内水面漁業組合連合会）など。

がみられ、当然のように、そこにふさわしい魚やいろいろな生き物たちでにぎわいをなしていた。その生き物のひとつに人間の子供たち、つまり当時の私たちがいたわけである。

子供たちがタモ網を持って魚すくいに興じられるのは、水深のある淵から浅い瀬に移る間の、トロと呼ばれる区間であった。そこは水深も子供のひざから股下くらいまでで、流れも緩やかで、所どころに水草が茂っていた。その水草や岸辺の草むらのかげにお目当てのフナたちが潜んでいた。

見たこともない大物に出会った時、思わずふるえた

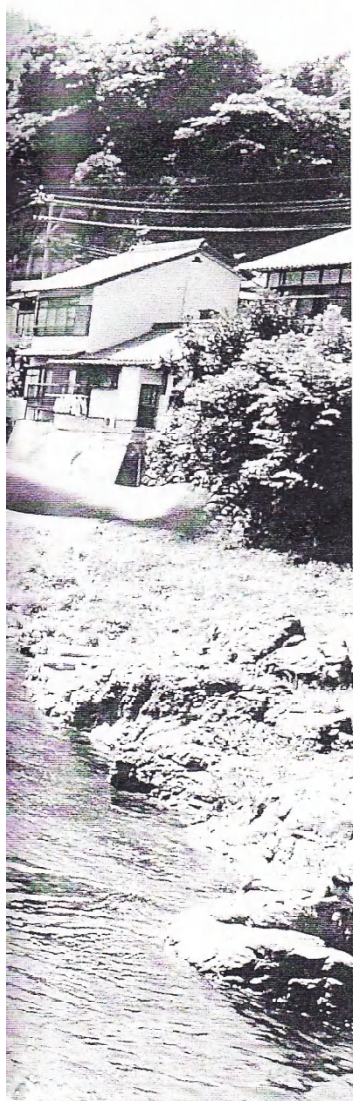
その日は土曜日だったので、学校から帰って昼御飯を食べた後、一目散にいつもの岸辺にか

けつけた。岸辺からあたりを一望して、まだだれもないことに少しほっとして、タモ網を握りしめて、川の中に入っていた。

はやる気持ちが川の水の冷たさでちょうどいやされかけた頃、水草の切れ目の手前で足が止まった。水草の切れ目から出ているその黒いものが、まぎれもなくフナの、しかも今まで見たこともないような大物のフナの尾びれだとわかった時、私のまわりの時間が止まってしまった。そして、これから起こるであろうドラマに身震いしながらも、すべての意識をその黒いものに向けた。

いつものように、水草の下手にタモ網をかまえ、

近くに水のきれいで
おもいきり遊べる川が
ある子どもは幸せだ



上手から勢いよく水草を踏んでいった。濁りが舞い上がった後、かすかにタモ網の柄を握る手に感触を残しただけで、網の中には何も入っていなかった。期待していたドラマの結末との落差に、しばらくその場に茫然と立ちつくした。しかし、あの大きな尾びれの正体を何としても見極めたいと思った私は、もう一度気を取り直して、あたりを探した。

さんざん探し回ったあげくに、もうあきらめかけた頃、最初に見つけた所よりも少し下手で、確かに見覚えのある尾びれを見つけた。今度は頭の中で描いていたように、ことが進んでその大きな尾びれの正体が、私の両手にしっかりと抱きしめられていた。もっとも、小振りのフナがもう一匹タモ網の中に収まっていたことと、すくい上げた瞬間にタモ網が柄の付け根からもげてしまったことは、予想外のことだったけれど。

自然を知っている 緩やかな大人の目に 守られ遊ぶ

少年時代の私にとって水辺

は、親や学校からの束縛を受けることもない、自分の感覚で支配できる身近な生活空間であった。そこに行けば、時には痛い思いや、危険な目にもあうことがあったが、何よりいつも予期せぬ楽しいできごとが待っていた。そして、生き物の不思議さを眺め、手の感触で感じたりもしながら、自然の奥行きを深さを知らず知らずのうちに学んでいたたのである。

また、当時は思いも及ばなかったが、この豊かな水辺に関わりを持っていたのは、多くの生き物や子供たちばかりではなかった。私をはじめての大物をすくった場所の下手には、川の中に飛び石が置かれていた。飛び石は川の浅瀬に、ひとつかえほどの平らな石を並べて、人が渡っていけるようにしたものである。

大水の時は水の中に隠れてしまいが、普段は生活道として役立つていた。人々は日々この飛び石を渡ることにより、川を身近なものと感じ、子供たちもそうした人々の視線に守られて、思う存分川遊びを楽しんでいたのである。



小川も子供たちも 管理されて変わった…

いつの頃からか、身近な小川

が水路と呼ばれるようになる
と、川遊びをする子供たちを目
にすることがなくなった。ほん
の三十年前まで、日常生活の中
で子供たちにとって、なくては
ならない生活習慣となっていた
川あ遊びという文化が、当事者
たちの記憶が呼び覚まされるこ
ともなく、次の世代に受け継が
れることもなく、当然のごとく
忘れ去られていくことに何か寂
然としない思いを抱きながら

も、私自身、アユやアマゴとい
った大人にとって価値のある魚
を追いかけることばかりにうつ
つを抜かしていた。

それでも、私の子供たちには
何とか、自分が楽しんだ程度に
は川遊びを楽しませてやりた
い。いや正直にいえば、自身の
心性がどこからきたのか、自分
の少年期を追体験してみたい思
いから、三人の子供たちを
身近な水辺に連れだした。

子供たちが最初に川に親しめ
るのは、きれいな水がとうとう
と流れている清流ではなく、身
近にあるメダカやザリガニ、オ

タマジヤクシなどがすむ、何の
変哲もない小川である。

しかし、そこは大人にとって
は何の価値も生み出さない空間
ということ、生活の中からも
意識の中からも葬り去られてい
た。その結果、かつての水辺を
中心とした人間も含む豊かな生
態系そのものが、もはやずたず
たになっていたのである。

こうして、子供たちでにぎわ
っていたはずの水辺から、あた
りを見回してみると、子供の声
は聞こえない。それどころか子
供の姿を見かけることもない、
ただ同じような風景が至るとこ

ろに広がっているのに気づかさ
れた。

川あそびの復権が 地球環境を救う!?

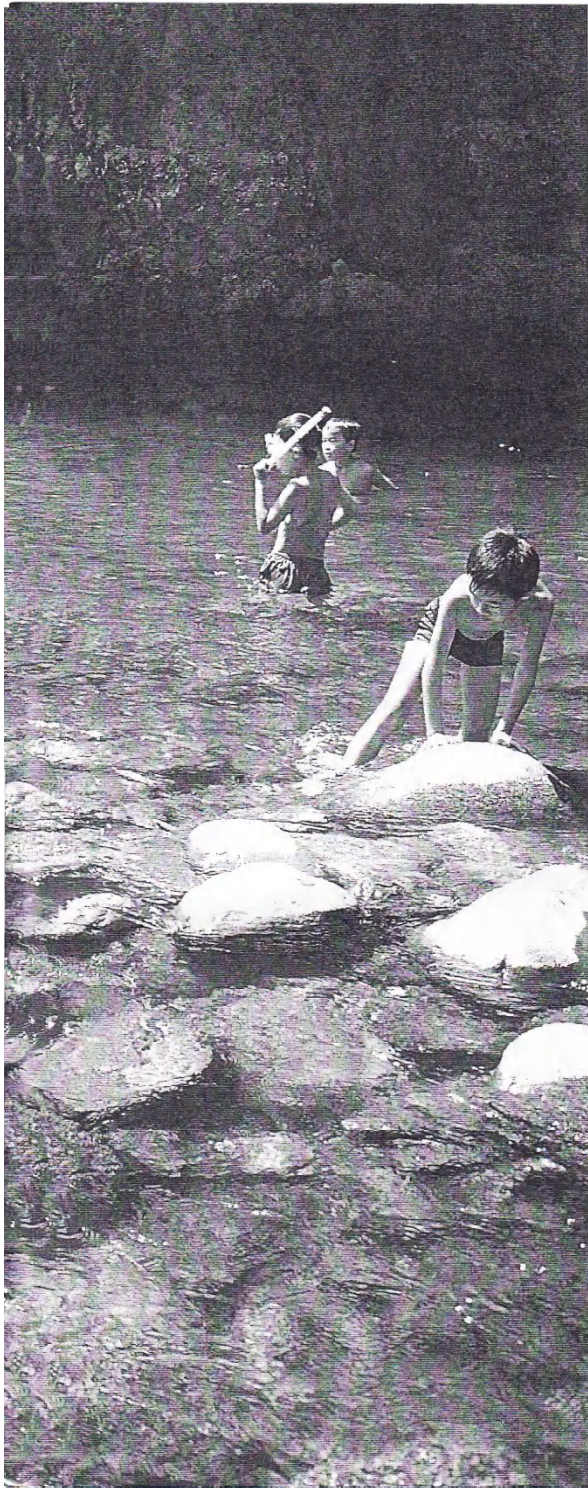
治水や利水という名のもと
に、河川工学という工学の一分
野にすぎない学問だけで日本中
の川を管理しようとした時、多
くの川の生き物が姿を消し、川
と人とのつながりを絶たれて、
川は汚いものを流すだけ、水
を利用するためのだけの水路とな
ってしまった。

さらに大人たちは、川の遊び
の主役だった子供たちを川遊び

などという、危険で汚く、何の
役にも立たない遊びに夢中に
させるよりは、将来のためにし
っかり勉強するようにと学校や
塾へ追い立てていった。そのか
わり、泳ぎたいなら水もきれ
いで安全なプールへと押し込め、
遊びたいならもつと手軽におも
しろいTVゲームを買い与えて
いった。気がつく、子供たち
もおかしくなっていた。

そして、食べ物や大量に安く
手に入れるために、農薬をどん
どん使い、田んぼを管理しやす
いようにコンクリートの水路で
囲み、川とのつながりを断ち切
った結果、まず最初にメダカが
姿を消し、それと同時に川遊び
をする子供たちも姿を消してい
った。その揚げ句、日本では安
く手に入らないからと、外国か
ら食べ物やほとんど輸入するよ
うになり、この国は自分たちの
食べ物でさえ、満足に作り出す
ことができない国になってしま
ったのである。

これらのできごととは、一見何
の関係もないように見えるかも
しれないが、実はすべてリンク
して起こっていることではない
だろうか。





川に行くだけで
子どもは何かを
発見する

経済的価値や効率などは、幸
せを測る物差しのひとつにすぎ
ないもので、そのたつたひとつ
の物差しを振りかざし、世の中
のものをすべてを制御しようと
したために、私たちは重大な誤り
を犯してしまったのではないだ
ろうか。

それならば、まず子供たちが
川遊びができるようにしてあげ
る。川遊びの復権をまじめに考
えることは、地球環境問題を
はじめとする二十一世紀におい
て、私たちに課せられた難問を
解決するためのヒントになるは
ずである。なぜなら、川遊びは
環境や生き物、それらを含めた
自然と人間のかかわりの総体と
して成り立っているものであ
り、人の心性のありように深く
かかわっているものだから。